

## 『幕末横浜オランダ商人見聞録』

本書の請求記号 291.37 Ass

稲垣宏行

本書の著者であるオランダ商人C.T.アッセンデルフト・デ・コーニングは、日本を3度訪れています。1度目は上陸は叶いませんでしたが1845年に、2度目の1851年には長崎の出島に、3度目の1859年には横浜に滞在しました。

本書は、デ・コーニング（以下、著者）の2度目と3度目の訪日について記した紀行文です。本書があえてこの2つの時期を選んだのは、少々退屈ながらも平穏な出島の商館での滞在と、攘夷派武士や災害などに荒れていた横浜の外国人居留地とを対比させるという意図があったからです。

著者は横浜滞在中、直接、攘夷派武士に襲われた訳ではありません。それでも、身近な居留民の惨殺死体は何度も目にしていました。その中にはオランダ人船長も含まれていました。原因不明の火災に見舞われ、攘夷派武士の企みではないかという恐怖や疑心暗鬼によるストレスもありました。地震や津波、台風にも見舞われました。これらの災害が恐ろしいのは、身の安全もさることながら、貿易に持ち込んだ積荷が損害を受ける危険性です。

しかし、これらの事件と並んで目を引かれるのが、横浜に滞在する血の気の多い居留民（主にイギリス人）たちです。著者が「西洋文明の面汚し」「墮落した紳士たち」などと蔑む彼らは、著者の従者の一人と殴り合いをし、拳銃による決闘にまで発展しかけました。また著者は、彼らが日本の金貨（小判）を買い漁ったせいで、今まで安価だった日本の商品の大幅な物価高に繋がり、自らもそのことで不利益を被ったと嘆いていますが、この夥しい金貨流出は個人だけでなく、大手商社も一枚噛んでいたことも示唆されています。

当時、横浜の治安が良くなかったのは、まだ外国人居留地として新しかったということもありますが、継続中の第二次アヘン戦争（アロー戦争）に

よって、西洋諸国の軍事力を日本の治安維持に集中出来なかった事情もあったようです。

著者は通商関係にあるオランダ人ということもあって、日本には概ね好意的で、日本人は「文明的」で「いかなる時でも尊厳と名誉を保っている」と評しています。オランダが先頭に立って、日本の欧米に対する知識不足や欧米との外交の支援を行っていれば、不公正な貿易や横浜の居留民が危害を加えられる事態も避けられたかもしれないとさえ思っているようです。ただ、武士だけは攘夷派も含め忌み嫌っていました。彼らが過激な攘夷思想を持つ水戸斉昭に操られていると過剰な恐れを抱いている節さえあります。

本書は著者の視点から描かれているため我々が知っている史実と食い違う部分もあり、違和感を感じることもあるかもしれません。しかし、幕末期の日本が外国人からどのように見えていたかを知る意味では貴重であることは間違いのないと思います。彼らの異なる視点から、既存の史実では気付かれなかった初期の横浜居留地の実態や開国に伴う海外の貿易状況などが見える可能性も考えられます。

本書は、著者が作家を志向していたこともあって物語的な文体も多分にありますが、出来事の一つ一つが生き生きと記されているという利点があります。外交官や士官などからではなく、横浜漁師のヨサエモンや著者の従者のヤン・スパウターなど身近で親しい人々の視点で主に描かれていることも魅力の一つかもしれません。また、著者だけでなく、英訳者の序論や末尾の注記による解説も、本書の参照をより有意義にするものと思います。

いながき ひろゆき（司書・管理運営課）